

身体障害者およびパラアスリートに対するイメージ は身体障害者との交流態度に関連するのか？

内田, 若希
九州大学大学院人間環境学研究院

安井, 友康
北海道教育大学札幌校

山本, 理人
北海道教育大学岩見沢校

小松, 智子
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/6776444>

出版情報：健康科学. 45, pp.23-33, 2023-03-27. 九州大学健康科学編集委員会
バージョン：
権利関係：

—原 著—

身体障害者およびパラアスリートに対するイメージは 身体障害者との交流態度に関連するのか？

内田若希^{1)*}, 安井友康²⁾, 山本理人³⁾, 小松智子¹⁾

Others' perceptions of individuals with physical disabilities and of
para-athletes: Are they related to attitudes about interacting with
individuals with physical disabilities?

Wakaki UCHIDA^{1)*}, Tomoyasu YASUI²⁾, Rihito YAMAMOTO³⁾,
and Tomoko KOMATSU¹⁾

Abstract

Although the improvement of environmental barriers has been promoted, prejudice and discrimination towards individuals with physical disabilities still exist in Japan. To create an inclusive society, such attitudes towards individuals with physical disabilities must change. The main purpose of this study was to examine whether perceptions of para-athletes are related to attitudes about interacting with individuals with physical disabilities. Our secondary objective was to examine how perceptions of individuals with disabilities and perceptions of para-athletes differed in their relationships with attitudes. In total, 1,137 men, 1,250 women, and 7 others completed a web survey. Path analysis revealed that perceptions of individuals with physical disabilities correlated with sense of resistance about “Friendship” and “Self-assertion”. However, perceptions of para-athletes correlated with only sense of resistance about “Friendship”. These results implied that, because the positive perceptions of para-athletes were induced by a focus on their high-performance capabilities, the contribution of perceptions of them on attitudes towards individuals with physical disabilities is limited.

Key Words: prejudice, discrimination, inclusive society, para-sport, high performance

(Journal of Health Science, Kyushu University, 45: 23-33, 2023)

1) 九州大学大学院人間環境学研究院 Faculty of Human-environment Studies, Kyushu University, Fukuoka, Japan

2) 北海道教育大学札幌校 Faculty of Education (Sapporo Campus), Hokkaido University of Education, Sapporo, Japan

3) 北海道教育大学岩見沢校 Faculty of Education (Iwamizawa Campus), Hokkaido University of Education, Iwamizawa, Japan

*連絡先：九州大学大学院人間環境学研究院 〒819-0395 福岡県福岡市西区元岡 744 Tel&Fax : 092-802-5164

*Correspondence to: Faculty of Human-environment Studies, Kyushu University 744 Motoooka, Nishi-ku, Fukuoka 819-0395, Japan
Tel&Fax: +81-92-802-5164 E-mail: uchida@ihs.kyushu-u.ac.jp

はじめに

1950年代頃まで、機能・形態上、標準から外れた「障害のある身体^{注1)}」を有する人々は、偏見や保護・治療などの名目によって、社会から排除される状況にあった¹⁾。しかし、1970年代に入ると、世界各地において、そのような状況の改革を希求する現代障害者運動がより活発化するようになり、障害者が直面する問題の原因は、彼ら・彼女らの個人の身体ではなく、偏見や差別、排除を生み出す社会にあるという主張が展開されるようになった¹⁾。つまり、「障害のある身体」を有する人々の社会への参加を阻む物理的・制度的な障壁や、「障害のある身体」に対する偏見や差別を孕んだ、社会そのものの変革が求められるようになった。

我が国においては、建築物などの物理的な障壁の除去に向けた取り組みが、東京1964パラリンピック競技大会を契機とし、1960年代後半から進められてきた²⁾。また、制度的な障壁についても、多様性を認め合う社会の構築に向けた法律の制定や整備がなされてきた³⁾。このように、物理的・制度的な障壁を除去・改善するための施策が行われ、「障害のある身体」を有する人々が社会に受容されるようになってきた。しかし、その一方で、それは表層的な変化に過ぎず、彼ら・彼女らに対する回避的行動や攻撃などの差別は、現在も残存したままであることが指摘されている⁴⁾。

この背景には、「障害のある身体」を望ましくないものとみなして蔑視の対象としたり⁵⁾、他者が有する自分にはない特性(=障害のある身体)を、「多様」ではなく「異質」なものとして捉えて排除したりする⁶⁾人間の心理が存在すると考えられる。実際に、内閣府の障害者に関する世論調査⁷⁾では、障害を理由とする差別や偏見があると思うかという問いに対して、「あると思う」および「ある程度はあると思う」と回答した者の合計は、83.9%と高い割合を示した。さらに、日本財団のダイバーシティ&インクルージョンに関する意識調査⁸⁾においても、障害者、高齢者、セクシャルマイノリティなどの社会的マイノリティに対して、社会に差別や偏見があると感じている者は95.9%、日常生活の中で、自分の中にある「心の壁」を意識した経験のある者は73.4%にのぼった。我が国において、「誰もが互いに尊重して支え合い、多様な在り方を相互に認め合える社会(共生社会; 文部科学省⁹⁾)」の実現が謳われて久しいが、その実現にはいまだ遠く及ばないといわざるをえない。

Cuddy et al.¹⁰⁾は、共生社会の実現には、実際に「障

害のある身体」を有する人々と接する際に、どのような行動をとるかが重要であると指摘している。また、栗田・楠見¹¹⁾も、「障害のある身体」を有する人々と健常者がともに生きる公平な社会を構築するためには、偏見や差別の背景に存在する態度を検討する必要性を指摘している。これらの指摘を踏まえれば、物理的・制度的な障壁の除去・改善が促進されてきた一方で、偏見や差別などが今もなお社会の中に存在する我が国において、「障害のある身体」を有する人々に対する態度の変容は、共生社会の実現に向けて喫緊の課題といえよう。

では、「障害のある身体」を有する人々に対する態度に、影響を及ぼす要因は何であろうか。多くの先行研究において、イメージが態度に影響を及ぼす重要な要因とされていること¹²⁾から、「障害のある身体」を有する人々に対する態度に関しても、イメージが影響力を持つ可能性がある。一般的に、「障害のある身体」を有する人々に対するイメージは、ネガティブであることが多い。その理由は、障害者に関する情報に触れた際に、「かわいそう」「不自由」といったイメージが素早く想起されること⁴⁾や、「障害者は能力が低い」のような固定観念が保有されていること¹³⁾が挙げられる。また、「障害のある身体」のようなネガティブな情報やそれに対するネガティブな感情は、ポジティブなものよりも大きな影響力を持つため¹⁴⁾、「障害のある身体」を有する人々に対して、ネガティブなイメージがより形成されやすいこともあるだろう。

このように、「障害のある身体」を有する人々に対するネガティブなイメージが保持されている一方で、パラリンピックなどに出場するエリートレベルのパラスリートに対するイメージは、ポジティブなもののみなされることが多い。現代のパラリンピックは年を追うごとに競技レベルの高まりを見せており、定められた標準記録の突破や世界ランキングの上位にランクインするなど、厳しい条件をクリアした世界のトップアスリートだけが出場できる国際競技大会へと成長を遂げてきた。このような流れの中で、1990年代以降、エリートレベルのパラスリートの存在によって、健常者の視点が、ネガティブなイメージを生じしやすい「障害のある身体」から、「高いパフォーマンス能力」といったポジティブな側面に移行するという知見が、いくつかの研究で提示されてきた^{15,16)}。

我が国において2021年に開催された東京2020パラリンピック競技大会においても、圧倒的なパフォーマ

ンスを見せるパラアスリートの存在が、共生社会の実現に向けて人々の心のあり方の変容に寄与することが期待されていた¹⁷⁾。そして、大会終了後に観戦者に感想を尋ねた世論調査¹⁸⁾においては、「選手が競技にチャレンジする姿や出場するまでの努力に感動した」と回答した者が72%、「想像していた以上の高度なテクニックや迫力のあるプレーに驚いた」と回答した者が71%に達しており、高いパフォーマンス能力に視点が向けられていたことがわかる。

ここまでを踏まえると、高いパフォーマンス能力を発揮するパラアスリートに対してイメージがポジティブであることは、「障害のある身体」を有する人々に対する態度の変容の一助となる可能性がある。しかし、栗田・楠見¹²⁾は、たとえイメージが改善したとしても、実際の交流場面における態度に変化がなければ、障害者を取り巻く環境は改善されないと指摘している。つまり、パラアスリートに対するイメージがポジティブだったとしても、「障害のある身体」を有する人々に対する態度と関連しなければ、パラアスリートの存在が共生社会の実現に寄与するかを真に論じることはできず、表層的な変化に留まる社会から脱却することは叶わない。以上のことから、高いパフォーマンス能力を呈示するパラアスリートに対してのイメージが、スポーツをしていない、あるいはできない「障害のある身体」を有する人々を含めた交流場面における態度に、ポジティブに関連するののかを検討することは重要な課題である。

加えて、スポーツをしない、あるいはできない者も含めた「障害のある身体」を有する人々に対するイメージと、パラアスリートに対するイメージが乖離するといった指摘もある⁹⁾。つまり、「障害のある身体」を有する人々に対するイメージとパラアスリートに対するイメージでは、交流場面における態度との関連のあり方に差異が存在する可能性も残される。

そこで本研究では、①パラアスリートに対するイメージが、「障害のある身体」を有する人々との交流態度と関連するののか、②「障害のある身体」を有する人々に対するイメージとパラアスリートに対するイメージでは、実際の交流場面における態度との関連のあり方に差異があるのかといった2つの問いを設定した。ただし、障害種によって態度に差が存在しうること¹²⁾、身体障害が我が国で最も多い障害種であること^{註2)}、およびパラアスリートに対するイメージを扱うことから、

特に身体障害者に焦点を当てて検討することにした。よって、本研究では、身体障害者およびパラアスリートに対するイメージと、身体障害者との交流態度の関連について、横断的に検討することを目的とした。

方法

1. 調査対象者

本研究では、「障害のない身体」を有する健常者を調査対象者とした。「障害のある/ない」の区別は、身体障害者手帳の保有有無により判断した。ウェブ調査会社(マイボイスコム株式会社)のパネル(モニタ)から調査対象者を募集し、オンライン調査を実施した。調査に際しては、全国に在住の20歳から50歳代の成人を対象に、性年代均等回収を行った。

はじめに、1,500名の回収をウェブ調査会社に依頼したが、データクリーニングおよびデータスクリーニングにより有効回答数が大幅に減少することを想定し、実際には3,000名の回収が得られるまで調査を実施した。回収された3,000名のデータに対し、データクリーニング(誤回答、短時間回答、およびストレートライン回答を含む回答者の検出・除外)を実施した。その後、データスクリーニングとして、身体障害者手帳の保有者を除外した。

また、Webサイトなどを用いたオンライン調査では、回答に際して必要最小限を満たす手順を決定し、追求する行動である「努力の最小限化¹⁹⁾」が問題となることから、これを検出するためのトラップ設問を設定した。本研究においては、増田ら²⁰⁾で使用された「努力の最小限化を検出するためのInstructional Manipulations Check」を提示した。具体的には、「インターネットを用いた調査においては、うそをついたり、質問を読まないで、いい加減な回答をしたりする方がいることが問題となっています。つきましては大変失礼なお願いですが、あなたがこの文章をきちんと読んでいるかどうかを確認させてください。あなたがこの文章をお読みにになったら、以下の質問には回答せずに(つまり、どの選択肢にもクリックせずに)、次のページに進んでください」と指示した。このトラップ設問において、「次へ進む」のボタンを直接クリックせずに、選択肢(「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらともいえない」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」)のいずれかをクリックした者を分析から除外した。

最終的に、有効回答数は2,394名(男性1,137名,女性1,250名,その他4名,回答しない3名)となった。平均年齢は41.0±11.00歳であった。なお、調査時期は2021年10月であった。

2. 質問項目

1) 身体障害者イメージ尺度

身体障害者に対するイメージの測定には、身体障害者イメージ尺度¹²⁾を用いた。この尺度は、身体障害者に対するイメージを表す形容詞対(たとえば、「不利な-有利な」「立派でない-立派な」「楽しい-つらい」など)で構成され、「社会的不利(7項目)」「尊敬(6項目)」「同情(4項目)」の3つの下位尺度から成る。形容詞対の当てはまりの程度は、「どちらでもない(4点)」を中央に配し、「非常に(ネガティブな形容詞側を1点, ポジティブな形容詞側を7点)」までの7段階で評価するSD法を用いた。本研究で用いたSD法の回答例を図1に示す。

また、身体障害者イメージ尺度の形容詞対を用いて、パラアスリートに対してのイメージも同様に回答を求めた。なお、各下位尺度得点が高いほど、ポジティブなイメージを有していることを示す。

2) 交流態度尺度

身体障害者との交流態度の測定には、栗田・楠見¹²⁾が作成した交流態度尺度を用いた。この尺度は、障害観尺度²¹⁾の下位尺度のひとつである「交流の場での当惑(8項目)」と、抵抗感尺度²¹⁾の下位尺度である「交友関係(9項目)」および「主張(9項目)」に関する抵抗感の合計26項目で構成される。いずれの下位尺度においても、障害条件を自由に設定できるようになっており、本研究では「身体障害」を障害条件とした。

「交流の場での当惑」は、「身体障害のある人に対し遠慮がある」「身体障害のある人とは、どのように話をしたらよいかわからない」などの項目から成り、全く同意できない(1点)から全く同意できる(6点)までの6件法で回答を求めた。なお、得点が高いほど「交流の場での当惑」が高いことを示す。

「交友関係」および「主張」に関する抵抗感の項目は、ある特定の交流場面において、よく知らない身体障害のある学生と一緒にいる複数の場面について記述されており、どのくらい抵抗感を感じるかを尋ねるものであった。本研究の調査対象者が20歳から50歳代の成人であることを踏まえ、「身体障害の学生」という

	非常に	かなり	やや	どちらでもない	やや	かなり	非常に	
不利な	○	○	○	○	○	○	○	有利な
立派でない	●	●	●	●	●	●	●	立派な
楽しい	○	○	○	○	○	○	○	つらい

図1. 身体障害者イメージ尺度(SD法)の回答例

記述を「身体障害のある人」に修正した。また、「学内」「授業」「寮」などの学生に特有な場面設定が含まれる項目についても、「寮でのパーティー」を「寮や職場でのパーティー」に、「授業のノート」を「授業のノートや仕事の資料など」のように、本研究の調査対象者に合わせて修正した。「交友関係」に関する抵抗感「身体障害のある人とレストランで食事をする場合」「身体障害のある人に話しかけようとする場合」などの場面、「主張」に関する抵抗感「身体障害のある人との見解が完全に対立した場合」「忙しいため身体障害のある人の手伝いを断る場合」などの場面に関する項目で構成され、抵抗がない(1点)から抵抗がある(5点)の5件法で回答を求めた。いずれの下位尺度も、得点が高いほど、身体障害者との交流場面に抵抗を感じていることを示す。

3. 統計処理

はじめに、身体障害者およびパラアスリートに対するイメージと身体障害者との交流態度の下位尺度間におけるピアソンの積率相関係数を算出した。統計解析には、IBM SPSS Statistics 28.0を用いた。ついで、変数間の関係性を検討するために、下位尺度の合計点を観測変数として扱い、身体障害者およびパラアスリートに対するイメージの下位尺度を外生変数、身体障害者との交流態度の下位尺度を内生変数とする、因果的モデルを検証した。

因果的モデルの設定においては、相関分析の結果を踏まえ(表2)、有意な相関係数が認められた同一次元の下位尺度間に共分散を設定した。具体的には、外生変数においては、有意な関連の認められなかった身体障害者に対する「社会的不利」のイメージと「尊敬」のイメージ間、および身体障害者に対する「尊敬」のイメージとパラアスリートに対する「社会的不利」のイメージ間を除くすべての変数間に共分散を設定した。

内生変数においては、すべての下位尺度の誤差変数間に共分散を設定した。加えて、誤差変数から観測変数への非標準化パス係数をすべて1に固定した。

上記の因果的モデルを検証するために、構造方程式に基づくパス解析を実施した。統計解析には、Amos 28.0を用いた。はじめに、分析モデル全体のデータへの適合度を評価し、ついで観測変数間のパス係数の検討を行った。パス係数の有意水準はWald検定による棄却比 (Critical Ratio: C. R.) で判断した。なお、用いた各下位尺度得点の平均値および標準偏差を表1に示した。

4. 倫理的配慮

本研究は、事前に第一著者の所属先の倫理委員会による審査を受け、承認を得てから実施された (承認番号 202107)。オンライン調査の実施に際しては、ウェブサイトのトップページに、調査の目的および方法、個人情報取り扱い、インフォームド・コンセントにかかる事項、調査の問い合わせ先について記載した。また、身体障害者と接する場面での行動のあり方や考え方を問う項目が含まれるため、調査対象者が心理的負担感を抱くことが懸念された。このため、「回答に際し負担を感じる場合には、無理に回答を続行せず、回答を中止していただくようお願いいたします」と記載し、心理的負担感を回避できるように配慮した。

結果

1. 各下位尺度間の相関

構造方程式に基づくパス解析による検証に先立ち、身体障害者およびパラアスリートに対するイメージと身体障害者との交流態度の下位尺度間におけるピアソ

表 1. 各下位尺度得点の平均値および標準偏差

	M	SD
身体障害者に対するイメージ		
社会的不利	22.3	5.06
尊敬	25.7	3.60
同情	14.5	2.54
パラアスリートに対するイメージ		
社会的不利	27.1	4.34
尊敬	28.7	5.02
同情	17.2	2.74
身体障害者との交流態度		
交流の場での当惑	28.4	7.00
「交友関係」に関する抵抗感	24.1	7.78
「主張」に関する抵抗感	27.8	6.96

Note. 各下位尺度の最高得点は、社会的不利49点、尊敬42点、同情28点、交流の場での当惑48点、「交友関係」に関する抵抗感54点、「主張」に関する抵抗感54点である。

表 2. 各下位尺度間における相関係数

	相関係数								
	2	3	4	5	6	7	8	9	
身体障害者に対するイメージ									
1 社会的不利		.70**	.38**	-.34**	-.08**	-.29**	-.15**	-.26**	
2 尊敬	-.03		.04	.62**	.41**	-.14**	-.24**	-.01	
3 同情			.29**	-.11**	.10**	-.31**	-.26**	-.27**	
パラアスリートに対するイメージ									
4 社会的不利				.13**	.48**	-.14**	-.13**	-.11**	
5 尊敬					.64**	-.05*	-.21**	-.09**	
6 同情						-.11**	-.23**	-.02	
身体障害者との交流態度									
7 交流の場での当惑							.60**	.52**	
8 「交友関係」に関する抵抗感								.68**	
9 「主張」に関する抵抗感									

** $p < .01$, * $p < .05$

ンの積率相関係数を算出した (表 2)。水本・竹内²²⁾の相関分析における効果量の目安に基づき、 $r = .10$ で小 (Small), $r = .30$ で中 (Medium), $r = .50$ で大 (Large) の関係性が認められると判断した。

以下では、①身体障害者に対するイメージとパラアスリートに対するイメージの下位尺度間 (外生変数間)、②身体障害者およびパラアスリートに対するイメージの下位尺度と身体障害者との交流態度の下位尺度間 (外生変数と内生変数間) に分けて、結果を示す。

1) 身体障害者に対するイメージとパラアスリートに対するイメージの相関

身体障害者に対する「社会的不利」のイメージとパラアスリートに対する「社会的不利」のイメージ、身体障害者に対する「尊敬」のイメージとパラアスリートに対する「尊敬」「同情」のイメージ、および身体障害者に対する「同情」のイメージとパラアスリートに対する「社会的不利」「同情」のイメージ間において、有意な正の相関が認められた ($r = .10$ から $.62, p < .01$)。効果量の目安を踏まえると、身体障害者に対する「同情」のイメージとパラアスリートに対する「同情」のイメージ間において小の関係性となったが、それ以外

の下位尺度間では概ね中から大の関係性が確認された。

一方、身体障害者に対する「社会的不利」のイメージとパラアスリートに対する「尊敬」「同情」のイメージ、および身体障害者に対する「同情」のイメージとパラアスリートに対する「尊敬」のイメージ間においては、有意な負の相関が示された ($r = -.08$ から $-.34, p < .01$)。効果量の目安から、小から中程度の関係性が確認された。

なお、身体障害者に対する「尊敬」のイメージとパラアスリートに対する「社会的不利」のイメージの間には、有意な相関が認められなかった。

2) 身体障害者およびパラアスリートに対するイメージと身体障害者との交流態度の相関

身体障害者に対する「尊敬」のイメージおよびパラアスリートに対する「同情」のイメージと、「主張」に関する抵抗感の間には、有意な相関が認められなかった。それ以外の身体障害者およびパラアスリートに対するイメージと身体障害者との交流態度の間には、すべて有意な負の値が示され ($r = -.05$ から $-.31, p < .05$)、効果量は概ね小から中の範囲となった。なお、因果的モデルの検証においては、外生変数間の共分散も考慮

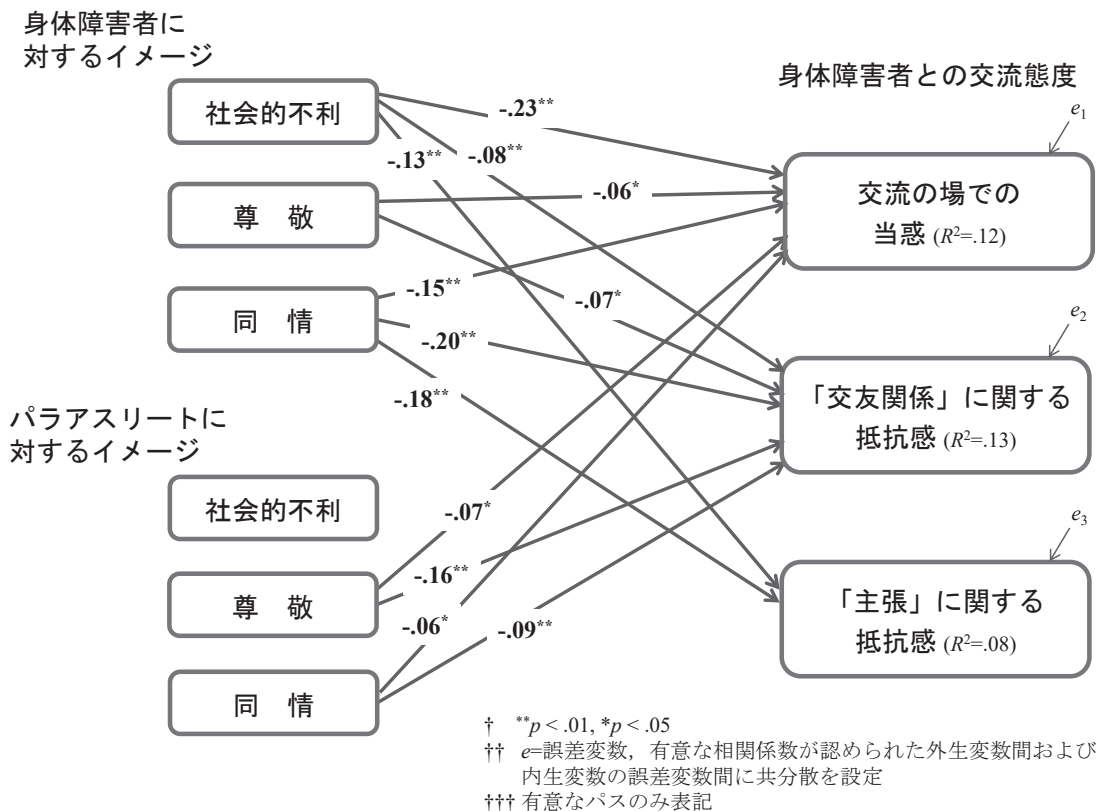


図 2. 身体障害者およびパラアスリートに対するイメージと身体障害者との交流態度の関連

に入れるため、有意な相関が認められなかった変数間にもパスを設定して分析を進めることとした。

2. 因果的モデルの検証

構造方程式に基づくパス解析の結果を図 2 に示す。適合度指標は、GFI = .999, AGFI = .980, CFI = .999, および RMSEA = .040 となり、十分な適合度が得られた。効果量の目安となる決定係数は、「交流の場での当惑」で $R^2 = .12$, 「交友関係」に関する抵抗感で $R^2 = .13$, および「主張」に関する抵抗感で $R^2 = .08$ であった。効果量の目安は、 $R^2 = .02$ で小 (Small), $R^2 = .13$ で中 (Medium), $R^2 = .26$ で大 (Large) であることから²²⁾、本研究の効果量は概ね小から中となった。

身体障害者およびパラアスリートに対する身体障害者イメージから交流態度へのパス係数をみると、「交流の場での当惑」では、身体障害者に対する「社会的不利」($\beta = -.23, p < .01$), 「尊敬」($\beta = -.06, p < .05$), および「同情」($\beta = -.15, p < .01$) のイメージからのパス係数で有意な負の値が得られた。また、パラアスリートに対する「尊敬」($\beta = -.07, p < .05$) および「同情」($\beta = -.06, p < .05$) のイメージからのパス係数において、有意な負の値が確認された。パラアスリートに対する「社会的不利」のイメージからは、有意な関連が認められなかった ($\beta = .03, p > .05$)。

「交友関係」に関する抵抗感では、身体障害者に対する「社会的不利」($\beta = -.08, p < .01$), 「尊敬」($\beta = -.07, p < .05$), および「同情」($\beta = -.20, p < .01$) のイメージからのパス係数で有意な負の値を示した。また、パラアスリートに対する「尊敬」($\beta = -.16, p < .01$) および「同情」($\beta = -.09, p < .01$) のイメージからのパス係数において、有意な負の値が確認された。パラアスリートに対する「社会的不利」のイメージからは、有意な関連が認められなかった ($\beta = .02, p > .05$)。

「主張」に関する抵抗感では、身体障害者に対する「社会的不利」($\beta = -.13, p < .01$) および「同情」($\beta = -.18, p < .01$) のイメージからのパス係数が有意な負の値を示したが、「尊敬」のイメージは有意な関連が認められなかった ($\beta = .02, p > .05$)。また、パラアスリートに対するイメージは、いずれも関連しなかった（「社会的不利」で $\beta = .01$, 「尊敬」で $\beta = .04$, 「同情」で $\beta = -.05$, いずれも $p > .05$)。

考 察

本研究の目的は、身体障害者およびパラアスリート

に対するイメージと、身体障害者との交流態度の関連を横断的に検討することであった。以下で、本研究で得られた結果について、順に考察していく。

1. 身体障害者に対するイメージとパラアスリートに対するイメージの関係

身体障害者に対するイメージとパラアスリートに対するイメージの多くの下位尺度間で正の相関が認められたことから、パラアスリートに対するイメージがポジティブであるほど、身体障害者に対するイメージもポジティブとなることが示された。一方で、身体障害者に対する「社会的不利」のイメージとパラアスリートに対する「尊敬」「同情」のイメージの間、および身体障害者に対する「同情」のイメージとパラアスリートに対する「尊敬」のイメージの間に負の相関が認められた。

「社会的不利」は、1980年に世界保健機関によって採択された国際障害分類の社会的不利を表したものであり、身体障害の事実に基づく困難さや、身体障害に伴う不利・不便さに関する形容詞対で構成された¹²⁾。また、「同情」のイメージは、回答者の同情心を反映したもので、身体障害者に対するイメージの中で最も一般的なものである¹²⁾。つまり、本研究の結果から、パラアスリートに対する「尊敬」「同情」のイメージがポジティブなほど、身体障害者に対しては「障害のある身体」が有する困難さや不利・不便さに関するイメージを抱えていること、およびパラアスリートに対する「尊敬」のイメージがポジティブなほど、身体障害者に対して同情心を抱えていることが示された。

Brett & Bundon²³⁾ は、エリートレベルのパラアスリートが呈示する高いパフォーマンス能力に注目が集まることで、彼ら・彼女らの「障害のある身体」の存在が希薄化し、重度の身体障害者が社会的・心理的・文化的に排除されることを懸念している。また、パラアスリートに対しては、一流のアスリートとしての姿²⁴⁾や英雄的存在としてのパラアスリート像¹⁶⁾が投影されやすいことも指摘されている。以上の点と本研究の結果をあわせて考察すると、パラアスリートが有する「障害のある身体」が希薄化したり、あるいはパラアスリートの高いパフォーマンス能力が尊敬の対象となったりすることで、逆にその他の身体障害者においては、「障害のある身体」とそれに伴う困難さや不利・不便さが強調されてしまう可能性があるといえる。また、パラアスリートの高いパフォーマンス能力が尊敬の対

象として意味を持つことで、高いパフォーマンス能力を有していないとみなされる身体障害者が同情の対象となるといった、アイロニックな状況が生じている可能性が残された。近年では、パラアスリートが有する「障害のある身体」と「スポーツを行う身体」の二面性の間に矛盾が生じ、共生社会の推進に逆効果となるエリート・パラスポーツの功罪（パラリンピック・パラドックス）が論じられている^{16,23,25}。本研究の結果は、このエリート・パラスポーツの功罪の一端を示すものといえよう。

2. 身体障害者およびパラアスリートに対するイメージと身体障害者との交流態度の関係

本研究の結果から、身体障害者に対する3つのイメージやパラアスリートに対する「尊敬」「同情」のイメージがポジティブなほど、身体障害者との「交流の場での当惑」および「交友関係」に関する抵抗感が低いことが明らかとなった。また、「主張」に関する抵抗感は、身体障害者に対する「社会的不利」および「同情」のイメージがポジティブなほど抵抗感が低いことが示された一方で、パラアスリートに対するイメージはいずれも関連しなかった。本研究で使用した「交流の場での当惑」と「交友関係」に関する抵抗感の項目は協力関係に関する内容であるのに対し、「主張」に対する抵抗感の項目は葛藤的関係を主としている²¹。具体的にみると、「交流の場での当惑」と「交友関係」に関する抵抗感は、会話や食事・外出、支援などのような、一般的な日常生活における協力関係に関する項目で構成されている。一方、「主張」に対する抵抗感は、見解の対立や依頼の拒否、注意や催促など、自分の意思や考え、気持ちを直接的に伝える自己主張が求められる場面設定が多く、葛藤的関係に関する項目で構成されている。言い換えれば、前者は身体障害者との表面的な対人関係を、後者は本音の意見を言い合える対等な対人関係を含意するものである²¹。このことから、たとえパラアスリートに対するイメージがポジティブになったとしても、それは表面的な対人関係での交流態度とのみ関連するものであり、本音の意見を言い合える対等な対人関係の構築にはつながらないことが明らかになった。

また、身体障害者およびパラアスリートのいずれにおいても、「尊敬」のイメージは、「主張」に関する抵抗感との関連が認められなかった。「障害のある身体」は、健常者から望ましくないものとみなされたり⁵、「異

質」なものと捉えられたりする^{6,24}。また、先行研究において、「障害のない身体」によって支えられる日常が健常者として生きる世界、「障害のある身体」とともに生きることは身体障害者として生きる世界を意味し、両者の生きる世界が二元論的に分離されることが示されている^{24,26}。つまり、健常者にとっては、身体障害者は「異質」な存在であり、かつ「異質」な世界を生活している者とみなされやすく、この「異質」の源泉となる「障害のある身体」と結びつく「社会的不利」のイメージや、「障害のある身体」を有する人々に対する同情心を反映した「同情」のイメージが、「尊敬」のイメージよりも意味をもつことが考えられる。

一方で、他者との交流場面において、相互に尊敬しあう関係性とは、年齢や性別、職業や役割などの差異があっても、人間の尊厳に関しては違いがなく、互いに礼節を持って接することを前提とする²⁷。しかし、前述した通り、健常者と身体障害者の生きる世界が二元論的に分離されること^{24,26}や、「障害のある身体」のような異質性に起因する問題が、共生社会の実現の上で障壁となっていること²⁸を踏まえれば、「障害のある身体」という異質性を有する身体障害者に対して、「尊厳に違いはない」存在という意識をもつことは困難さを伴うであろう。このため、「尊敬」のイメージは、本音の意見を言い合える対等な対人関係を含意する「主張」に関する抵抗感と関連しなかったことも考えられる。

さらに、パラアスリートに対する「社会的不利」のイメージは、いずれの交流態度とも関連しなかった。エリートレベルのパラアスリートにおいては、高いパフォーマンス能力に注意が向くことで、「障害のある身体」が希薄になるとされる²³。加えて、健常者にとって、「障害のある身体」を有する身体障害者は異質な存在、高いパフォーマンス能力を発揮するパラアスリートは、自分たちにも共通する「スポーツを行う身体」を備えた存在と認識され、一般の身体障害者とパラアスリートの間に分離が生じることが懸念されている⁶。つまり、エリートレベルのパラアスリートが有する高いパフォーマンス能力に注意が向き、「障害のある身体」が希薄化することで彼ら・彼女らに対する「社会的不利」のイメージが良好になったとしても、スポーツをしない、あるいはできない者も含んだ身体障害者に対しては異質な存在としての認識が残り、交流態度の変化に結びつかない可能性があるといえよう。

3. 本研究の限界と今後の課題

本研究では、身体障害者に焦点を当てたため、交流態度尺度において身体障害を障害条件として設定した。しかし、多くの先行研究において、身体障害、知的障害、精神障害、発達障害といった区分の違いや、障害の可視性によって、障害者に対する態度形成が異なることが指摘されている^{11, 29, 30)}。よって、知的障害や精神障害、発達障害などの障害種、あるいは目に見える形で身体に表出しない障害(たとえば、聴覚障害や内部障害など)を内包する「障害のある身体」を有する人々に対しては、本研究の結果をそのまま適用することはできない。パラリンピックに出場するようなエリートレベルのパラアスリートは、様々な障害種を含めた障害者全体の中の一部であり、彼ら・彼女らが障害者像の代表性をどこまで持つのかには疑義があり³¹⁾、身体障害者の一部に限定して検討した点は本研究の限界である。

また、本研究では、多くの先行研究においてイメージが態度に影響を及ぼす重要な要因とされていること¹²⁾を踏まえて、身体障害者に対する態度にイメージが影響力を持つことを想定した因果的モデルを検証した。これにより、身体障害者との交流態度の変容に向けて、イメージをターゲット要因とする介入研究の理論的枠組みを提示することができた。しかし、本研究の結果はあくまでも横断的な結果を示すに留まり、身体障害者およびパラアスリートに対するイメージの変化が、身体障害者との交流態度を改善するという因果関係を示すには至らない。今後は、ボランティア活動への従事などの直接的な接触経験や、パラスポーツの観戦や障害理解教育などの間接的な接触経験の前後で、実際に身体障害者およびパラアスリートに対するイメージに変化が生じるのか、そしてその変化が、どのように身体障害者との交流態度の改善に影響するのかについて、縦断的に検討することが必要である。

加えて、本研究で検討した因果的モデルにおいて、効果量の目安となる決定係数は $R^2 = .08-.13$ であり、概ね小から中の効果量となった。このことを踏まえると、身体障害者との交流態度の変容をより促進するためには、態度に影響を及ぼすイメージ以外の要因についても検討することが不可欠である。そして、これらの要因を明らかにすることは、偏見や差別などの態度が社会の中に今も残る我が国において、誰もが相互に尊重し、認め合う共生社会の実現に向けて、さらなる前進につながるであろう。

本研究のまとめ

本研究の目的は、身体障害者およびパラアスリートに対するイメージと、身体障害者との交流態度の関連について、横断的に検討することであった。本研究で得られた結果は、以下の通りである。

- ① 「交流の場での当惑」では、身体障害者に対する3つのイメージとの間に、有意な負の関連が認められた。また、パラアスリートに対する「尊敬」および「同情」のイメージとの間に、有意な負の関連が認められた。
- ② 「交友関係」に関する抵抗感では、身体障害者に対する3つのイメージとの間に、有意な負の関連が認められた。また、パラアスリートに対する「尊敬」および「同情」のイメージとの間に、有意な負の関連が確認された。
- ③ 「主張」に関する抵抗感では、身体障害者に対する「社会的不利」および「同情」のイメージとの間に、有意な負の関連が認められた。一方で、パラアスリートに対するイメージは、いずれも関連しなかった。
- ④ パラアスリートに対する「社会的不利」のイメージは、いずれの交流態度とも関連しなかった。

本研究では、イメージが態度に影響を及ぼす重要な要因となることを踏まえ、身体障害者に対する態度にイメージが影響力を持つことを想定した因果的モデルを検証した。本研究の成果は、身体障害者との交流態度の変容に向けて、イメージをターゲット要因とする介入研究の理論的枠組みとなるであろう。しかし、横断的な検討のみであり、測定した要因間の因果関係を示していないこと、および身体障害者の一部に限定して検討したことは、本研究の限界である。また、因果的モデルにおいては、概ね小から中の効果量に留まった。このことから、身体障害者との交流態度の変容をより促進して共生社会の実現に寄与するためには、態度に影響を及ぼすイメージ以外の要因について検討することが、今後の課題として残された。

附 記

本研究は、JSPS 科研費 20K11362 の助成を受けた。また、本研究で用いたデータセットは、「内田若希・安井友康・山本理人・小松智子 (2023): 東京 2020 パラリンピック競技大会の観戦有無による身体障害者およびパラアスリートに対するイメージと交流態度の差異. アダプテッド・スポーツ科学, 21 (1): 印刷中」と同一の

ものである。

注 釈

1. 機能・形態上、標準から外れた「障害のある身体」とは、視覚障害、聴覚障害、肢体不自由、内部障害などの身体障害、知的障害、精神障害、および発達障害などの障害種を有する身体を意味する。
2. 現在、我が国の身体障害者数は428万7千人、知的障害者数は96万2千人、精神障害者数は389万1千人となっている¹⁷⁾。

引用文献

- 1) 後藤吉彦 (2005): 障害者/ 健常者カテゴリーの不安定化にむけて—障害学における新たな機軸として—. 社会学評論, 55 (4): 400-417.
- 2) 青木真美 (2019): 日本における交通バリアフリー政策の展開と問題点—京都市の事例から—. 交通権, 36: 74-91.
- 3) 高橋純一・成井彩美・大関彰久 (2019): 態度の評価成分と感情成分が障害者との交流意識に及ぼす影響. 人間環境学研究, 17 (1): 51-57.
- 4) 栗田季佳 (2015): 見えない偏見の科学—心に潜む障害者への偏見を可視化する. 京都大学学術出版会: 京都.
- 5) 後藤吉彦 (2007): 身体社会学のブレークスルー—差異の政治から普遍性の政治へ. 生活書院: 東京.
- 6) 内田若希・安井友康・山本理人・小松智子 (2023): 東京2020パラリンピック競技大会の観戦有無による身体障害者およびパラアスリートに対するイメージと交流態度の差異. アダプテッド・スポーツ科学, 21 (1): 印刷中.
- 7) 内閣府 (2017): 「障害者に関する世論調査」報告書 (平成29年8月調査). <https://survey.gov-online.go.jp/h29/h29-shougai/index.html>, (参照日2023年1月15日).
- 8) 日本財団 (2019): 「ダイバーシティ&インクルージョン」に関する意識調査. https://www.nippon-foundation.or.jp/app/uploads/2019/08/new_pr_20190823_01.pdf, (参照日2023年1月15日).
- 9) 文部科学省 (2012): 特別支援教育の在り方に関する特別委員会報告1—共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1325881.htm, (参照日2023年1月15日).
- 10) Cuddy, A. J. C., Fiske, S. T., and Glick, P. (2007): The BIAS map: Behaviors from intergroup affect and stereotypes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 92: 631-648.
- 11) 栗田季佳・楠見孝 (2014): 障害者に対する潜在的態度の研究動向と展望. *教育心理学研究*, 62: 64-80.
- 12) 栗田季佳・楠見孝 (2010): 「障がい者」表記が身体障害者に対する態度に及ぼす効果—接触経験との関連から—. *教育心理学研究*, 58: 129-139.
- 13) 栗田季佳・楠見孝 (2012): 障害者に対する両面価値的態度の構造—能力・人柄に関する潜在的-健在的ステレオタイプ—. *特殊教育学研究*, 49 (5): 481-492.
- 14) Baumeister, R. F., Bratslavsky, E., Finkenauer, C., and Vohs, K. D. (2001): Bad is stronger than good. *Review of General Psychology*, 5 (4): 323-370.
- 15) DePauw, K. (1997): The (in)visibility of disability: Cultural contexts and “sporting bodies”. *Quest*, 49: 416-430.
- 16) Purdue, D. and Howe, D. (2012): See the sport, not the disability?: Exploring the Paralympic paradox. *Qualitative Research in Sport*, 4 (2): 189-205.
- 17) 内閣府 (2022): 令和4年版障害者白書. <https://www8.cao.go.jp/shougai/whitepaper/r04hakusho/enbun/index-pdf.html>, (参照日2023年1月15日).
- 18) 齊藤孝信 (2022): 人々にとって“東京五輪・パラ”とは何だったのか—「東京オリンピック・パラリンピックに関する世論調査」—より. *放送研究と調査*, 72 (6): 2-33.
- 19) 三浦麻子・小林哲郎 (2015): オンライン調査モニターの Satisfice に関する実験的研究. *社会心理学研究*, 31 (1): 1-12.
- 20) 増田真也・坂上貴之・森井真広 (2019): 調査回答の質の向上のための方法の比較. *心理学研究*, 90 (5): 463-472.
- 21) 河内清彦 (2004): 障害学生との交流に関する健常大学生の自己効力感及び障害者観に及ぼす障害条件、対人場面及び個人的要因の影響. *教育心理学研究*, 52: 437-447.
- 22) 水本篤・竹内理 (2008): 研究論文における効果量の報告のために—基礎概念と注意点—. *英語教育研究*, 31: 57-66.
- 23) Brett, S. and Bundon, A. (2017): Disability models: Explaining and understanding disability sport in different ways. In: I. Brittain and A. Beacom (eds.) *The Palgrave*

- handbook of Paralympic studies. Basingstoke: Palgrave, 15–34.
- 24) 内田若希 (2017): 自己の可能性を拓く心理学—パラアスリートのライフストーリー. 金子書房: 東京.
- 25) Braye, S., Dixon, K., and Gibbons, T. (2013): 'A mockery of equality': An exploratory investigation into disabled activists' views of Paralympic Games. *Disability & Society*, 28 (7): 984–996.
- 26) 内田若希・橋本公雄・山崎将幸・永尾雄一・藤原大樹 (2008): 自己概念の多面的階層モデルの検討と運動・スポーツによる自己変容—中途身体障害者を対象として—. *スポーツ心理学研究*, 35 (1): 1–16.
- 27) 岩井俊憲 (2011): 勇気づけの心理学 増補・改訂版. 金子書房: 東京.
- 28) 山口恭平・田口賢太郎・松本郁恵・関根宏朗 (2011): 「異質な他者」との共生に向けて—セクシュアリティの多様性の考察から. *東京大学大学院教育学研究科紀要*, 51: 21–39.
- 29) Furnham, A. and Pendred, J. (1983): Attitudes towards the mentally and physically disabled. *British Journal of Medical Psychology*, 56 (2): 179–187.
- 30) 河内清彦 (2006): 障害者との接触経験の質と障害学生との交流に対する健常学生の抵抗感との関連について—障害者への関心度, 友人関係, 援助行動, ボランティア活動を中心に—. *教育心理学研究*, 54: 509–521.
- 31) 渡正 (2019): パラリンピックは多様性のある社会を実現できるか? *現代スポーツ評論*, 40: 148–152.